



令和2年度

鹿児島県の教育

8月号

巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会高等学校長副部会長

鹿児島中央高等学校校長
小屋敷 浩 昭

非日常という「日常」

白く力強い雲の背後から押し寄せる光が全身を取り巻き、汗が首筋や背中を流れていく日が続いている。年々、夏は長くなっている気がするが、反比例するかのよう到我慢の基準は低くなってきた。ただ、今年に限ってはいつもの夏が訪れてくれたことに感謝している。

既存の考え方に縛られることなく乗り越えていくしかない。

世界中で猛威を振るっている新型コロナウイルスのため、卒業式、入学式をはじめとする学校行事や教育活動の見直しを余儀なくさせられた。現在でも「非日常」の教育活動が「日常」の活動であると錯覚しかねない状態が続いている。パンデミックに遭遇することを、何人が予測していただろう。国は感染症対策はもとより、社会制度や生活様式の見直しに躍起になっている。鹿児島県体の開催は延期に、全国高校総体は中止となり、そのほか全国レベルの大会や研究会等も同様の決定が相次いでいる。感染者数の減少により、徐々に日常を取り戻しつつあるが、予想される第二波、第三波の襲来を完全には払拭できていない。学校の体育大会や修学旅行への影響は看過できないし、就職試験や大学入学共通テストについても同じである。こうした事態には確固たる正解など誰しも提示できないので、

とここで、直木賞作家、西加奈子氏の作品に「窓の魚」という小説がある。二組で旅行に出かけ、旅先でのたわいもない出来事を描写した内容となっている。主たる登場人物四人と旅館に居合わせた夫婦の妻、女将、使用人の関連人物三人に、それぞれの視点から同じ時間に起こった出来事について語らせている。複数の視点から同一の事象を描く内的多元焦点化の手法は芥川龍之介が「藪の中」で用いた手法と同じである。立場、間柄、経験等の異なる主観によって受け止められた事実は、全く違う心象風景となることを見事に表現している。正確な情報の有無、危機意識の欠如、先入観への固執等によって、事実は大きく変容するものである。

今後も「非日常」の状況は続くかもしれない。固定観念にとらわれ過ぎてはよくない。不安を払拭するためにも、正確な情報収集に努め、柔軟な発想をもって的確な判断をしたい。「観の目強く、見の目弱く、遠きところを近く見、近きところを遠く見る」という言葉がある。目先の事象に惑わされることなく、想像力を駆使して、将来の事象を俯瞰する目を身に付けたいと冷や汗を感じながら切に願っている。

令和2(2020)年 8月号

一般財団法人 鹿児島県校長会館
〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13
振替 02030-1-3192
TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷
鹿児島市東坂元二丁目29-1
TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般(財)県校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		



虫好きな先生と教え子たち

鹿児島昆虫同好会会長 一町 一成

令和二年は、新型コロナウイルスのために異常な春となりました。教育現場でも様々な支障があったかと思いますが、人の往来や物流が世界各地からに広がると、それに伴ってウイルスだけでなく、本来日本にいなかった種類の生きものも海外から入り込んでいます。命の危険もあるヒアリが大都市圏の港で見つかったとか、本県でも校庭や公園の厄介者として知られる、キク科の植物メリケンソウが入り込んだとかいうニュースを耳にします。近年は昆虫ではセミやハチ、カマキリなどが中国や韓国などから入って来ていることが知られています。

そんな中、奄美大島では現在、沖縄県では天然記念物のチョウ・フタオチョウが、本来いなかった同島に棲み着いてきています。自然飛来にしては疑問が多く、誰かが奄美大島に放した可能性が大きいのですが、詳細は分かっています。

私が所属する鹿児島昆虫同好会は、昭和二十七年（一九五二年）志布志高校の三人の高校生（福田晴夫さん・中尾景吉さん・新川勉さん）が始めた大隅昆虫同好会が発端になって設立された団体です。会員には小学生がいる家族から、いろいろな職業の方々、専門家を含めて県内外の約三百人の皆さんがいて、学校の先生

方も見られます。そのため高齢化が進む国内でよく全国の昆虫同好会の皆さんから、会員を増やす秘訣は？などと尋ねられます。その答えのひとつには、本会の歴史の中で、学校の先生方の存在が本会を牽引してきたこと、その教え子の皆さんが全国各地の大学に進学、各地で活躍されてきたことが上げられそうです。

そのような本会メンバー八人が執筆した昆虫の図鑑増補改訂第二版（南方新社）が今年五月に出版されました。この昆虫の図鑑は全国的にも高い評価を受け、地方出版物としては異例で、五回目の刷り増しを続けていますが、見方によつては鹿児島、日本には虫好きが多いということにも繋がります。このほか平成十五年、平成二十八年の本県絶滅危惧種調査報告書（レッドデータブック）の作成等にも会員が参加協力し、本会は県内の昆虫研究の牽引役を果たしている側面もあります。

さて本県は、南北約六百kmに及ぶ地域において、世界自然遺産に屋久島が登録され、現在奄美・沖縄地域の申請が行われるなど、自然豊かな地域として、全国的にも誇れる場所であることは間違いありません。そのような自然を後世に伝えていくには、そこにどんな生きものがいるのかを充分に認識しているヒトを育てないといけません。自然保護という名目の元に、単に

採集禁止、入山・入域禁止にするだけでは、その地域の生きものは守れません。

しかし近年、昆虫に限らず、植物や動物など野山の生きものに興味を持つ児童や生徒さんが減少、そして先生方にもフィールドワーカー、子供たちと一緒に野外の生物を調べようとする人が少なくなってきてはいないでしょうか。

昭和三十一年生まれの私は、串木野中学校在学中に、生物部顧問の先生に大きな影響を受けました。その後は鹿児島大学進学と共に鹿児島昆虫同好会に入会、当時、鹿児島中央高校の生物の先生・福田晴夫先生をはじめ本会の皆さん、在籍した鹿児島大学生物研究会の先輩方の指導を受けました。福田先生との出会いは、鹿児島県立博物館で一緒に仕事をすることになりました。海外までも一緒に調査研究に同行させてもらいました。

そして移動で有名になったアサギマダラが、初めて南下した記録のチョウにマークしたのは、本会会員の当時の市来町の高校生でした。今では県庁職員で虫関連の仕事に従事しています。

どうか身の回りの自然を観察できるアウトドア派もお育てください。虫のウォッチャー、植物の名前が分かる子を見いだしてください。室内でゲームに没頭する子だけでなく、ぜひ多様性のある子供たちを世に送ってください。

最後にその参考書として一冊の本をご紹介します。福田晴夫著「チョウが語る自然史」南方新社。チョウのことだけ書いてある本ではありません。教育・行政現場の皆さんにもお勧めの本です。



危機意識は常に高く

江内小(北) 加藤 研一郎

新任校長として着任し、三か月が過ぎた。そんな新米校長の私が提言などとははなはだおこがましいのだが、せっかくだいだいた機会なので、私の初心というような意味合いで読んでいただければ幸いである。

さて、校長として異動することが決まったとき、とてつもなく大きな不安に押しつぶされそうになっていた。この状況をしっかりと見極め、適切に判断しリードできるのだろうか。私のような者が・・・と迷ってしまう自分がいた。しかし、これまでもそうであったように、きつとこの人事には何か意味があるのだと前向きに考え直し、思いを巡らせた。そこで浮かんできたのは、仕えた校長先生方が常に口にしてきた「子どもの命を守ること、安心・安全な学校生活を守る」ことが何より一番「であること、そして、「いつも最悪の事態を想定して策を練る」ことだった。私はこのことを常に頭の片隅に置いて努めようと強く思った。

新年度が始まった。入学式は前年度の卒業式と同様に、入場者数を制限し、さらに時間を短

縮して実施。初めての校長の祝辞に四苦八苦したのが遠い昔のようにも感じる。その後も様々な学校行事やPTA行事を中止・延期しながら、それでもできるだけ、工夫・変更してできるものは実施してきた。マスク着用や手洗い、換気の徹底など、三密回避を基本にしながら対応したもののようやく一年生が学校に慣れ始めた。五月に学校が再開して一か月が経ち、新しい生活様式を実践しながらも、どこかコロナ禍が少し遠く感じられるようになってきていた頃に緊急事態宣言が完全解除された。すると、その直後から都心で再び感染者数が増え出し、第二波の危機感を募らせていたところに県内でのクラスター発生のニュースに戦慄が走った。「やはり」と言うべきか、ところによっては臨時休業する学校も出てきた。我が県にもついに招かれざる本格的な波がやってきてしまったという思いである。これが読まれる頃には少しでも収まっていることを祈ってやまない。

さて、四月の第一回目の校長研修会で、いざ

コロナが発生した時のマニュアルを作っておくことが重要であると言われた。マニュアルか……。登下校に授業、休み時間、給食時間、掃除時間、子どもたちが家を出てから帰り着くまでの間に潜む幾多の危険への対応にも手を焼くのに、これまで経験したことのない、見えないものを相手にどう対応したらよいか、どうにも雲を掴むような感覚に襲われた。しかし、手をこまねいていても何も始まらないので、まずは、今見えている危険因子を排除していこうと考え、学校内や周辺の危険を探して歩き回り、時間を見つけてはコロナ対策を考えながら、危険排除活動、別名、環境整備に精を出していた。そうして時間が経つにつれて少しずつ、対応について考えが進むようになり、ガイドラインを見ながら、やっとたたき台を作ることができた。もちろんまだ十分ではないが、マニュアルを作ること、いざというときに具体的に自分がどう判断し、動かなければいけないのかを整理し、ある程度の見通しをもつことができた。マニュアルを「作ることが重要である」と言われた意味も理解できた。コロナ禍はまだまだ緊張状態であるが、他にも今年に入ってあちこちで頻発する地震や数十年に一度の豪雨も不気味である。いつ大きな災害が起きるともかぎらない状況である。こんなときだからこそ、学校教育の大前提である「安心・安全な学校」づくり、仕組みづくりにしっかり取り組む、子どもたちの尊い命をしっかり守れるようにしていきたい。



最上位目標を定めることの大切さ

陵南中(始) 阿多石 英 樹



一 はじめに

入学式では、新入生に学校生活で気を付けてほしいことや中学生としての目指すべき姿が、「お祝いの言葉」として数多く贈られる。まずは学校長式辞。「新入生に意識してもらいたいことを三つ述べます。一つ目は〇〇」。続いて教育委員会告辞。「皆さんに大切にしてほしいことを三つ述べます。一つ目は△△」。さらにPTA会長祝辞。「皆さんに三つのお願いがあります。一つ目は□□」。ここまでで既に九つ。伝えたい思いは同じなので、当然贈られる言葉も似たようなものとなり、実数はやや少なくなると思われるが、祝電や小学校担任からの祝詞が読み上げられようものなら、その数は二桁となり、校長が最初に言った言葉が何だったかなどと思いつくのは難問クイズのレベルである。式の中だけでもこの状況であり、その後に行われる担任による学級開きや山のように渡されるプリントにも熱い言葉や想いが山盛りであり、生徒は登校初日から消化不良になりかねない。

二 肥大化する学校教育

学校教育現場も同じで、業務改善を推進する傍ら「消費者教育」「インクルーシブ教育」

「健康教育」「環境教育」等々、年々新しい分野の指導が加わり、分掌機構図は都会の地下鉄路線のように複雑化してきている。しかし、「あれもしたい。これもしたい」では結局のところ二兎を追う者は…となりかねない。

三 シンボルツリーの設定

本校には、生徒が自宅を出発してから帰宅するまでに体験するすべての学校生活(登下校・授業時間・休み時間・給食時間・清掃・部活動など)に通ずるキーワードがあり、「スクールミッション」と呼んでいる。校訓よりは身近で、学校教育目標よりもシンプルな文字通り生徒と教職員とが一丸となり、学校全体で取り組む大作戦である。赴任した一年目は、あれこれと手を出し学校経営に当たったが、どれも今一つであったという反省に立ち、二年目の昨年度にシンボルツリーとして立ち上げた。令和(Reiwa)元年度に陵南(Ryonan)中で生まれたスクールミッション第一号は、「RESPECT(大切に思い、感謝する心)」である。

四 目的は最上位目標の合意形成

幸運にも「元号」「校名」ともにRから始まり、語呂よくスタートしたこの「RESPECT」を一気に浸透させるべく、機会あるごとに話題として取り上げ、設定した目的や意義を校長の想いとともに語り続けた。併せて、啓発のために外注でポスターを作成したり、ドローンで空撮を行い、生徒と教職員が出演するプロモーションビデオを製作したりするなど、「R」へ賭ける本気度を伝え続けた。啓発活動が功を奏したのか、校長の思いを付度してくれたのかは不明だが、取組二年目に入り、職員が行う指導や講話、生徒会の取組などにもこの「R」が登場するようになり、職員が揃いで作るポロシャツや部活動のボールのデザインなどにも採用された。また、「学力向上プラン」における「学ぶ」意味が自らを高め大切にすることにあることや、歯などの疾病治療は最終的に自愛の感情を育てることにあることなど、これまで個々の目的を達成するために取り組んできた学力向上や生徒指導、保健指導などの手段が、「リスベクト」という最上位の目標で一つにパッケージされ、より大きなエネルギーを生み出し始めている。

五 おわりに

新型コロナウイルスによる影響で様々な教育活動が制限される中、子どもたちの自己肯定感を高める必要性が叫ばれている。今の子どもたちが数年後にコロナ世代などと揶揄されるのが決してないよう、私たちは限られた時間の中で最善の手立てや対策を考えながら、舵取りをしていかななくてはいけない。



課題の共通理解と組織を生かした 学校経営を目指して

東桜島小(市) 長 船 祐 介

一 はじめに

本校は桜島南西部に位置し、活発な活動を続ける南岳火口から四キロ弱の距離にある。学校の北側には桜島の南岳が迫り、南側には錦江湾が広がる。

校区は桜島の南側に広がり、東桜島中学校とは一小一中の関係にある。校区内に児童養護施設があり児童が通っている。地域は、過疎化と高齢化の波が押し寄せているが、校区コミュニティをはじめ、地域の方は学校にとっても協力的である。

児童数は減少傾向にあり、本年度は三十一名となった。学級は低学年と高学年が複式、四年生がいらないために三年生が単式に、特別支援学級二学級の五学級である。平成二十八年には文部科学省読書活動優秀実践校を受賞した。

二 学校の主な課題

(一) 防災・防犯教育の充実

桜島の爆発や降灰のほか、観光客が多く、交通量は多い。校区に空き家が多いこと、登下校時にカメラを向けられることもあることから、防災・防犯教育に力を入れてい

る。

(二) 読書の量から質の向上

読書冊数や授業での図書室活用は多いが、ジャンルの偏りや学年に応じた図書利用が少ないなど、質の向上が課題である。

(三) 学力の向上

主体性はあるが、課題処理スピードやよい考えへの練り上げに課題がある。また、低学年が複式学級となったことや臨時休業などによる学びの保障が課題である。

(四) 小・中・地域と連携した活動の推進

一小一中であることから中学校や地域と連携した活動の推進が求められる。

(五) 桜島らしい活動の推進

桜島について知らない実態がある。調べたり体験したりで終わるのではなく、発信に力を入れ桜島の魅力を再発見させたい。

三 本校の取組

(一) 学力向上に向けた取組を紹介したい。

① 検査分析を生かす取組

検査分析で終わっていた研修を、事前に資料作成を係に行わせ、研修時間は対策の検討を重視させた。具体的には重点指導場

(二) 研修での取組

学力向上には、問題を読み解く力を高める必要があると考え、全職員が授業を提供しながら指導法改善に取り組んでいる。

(三) 低学年の学びを保障する取組

複式の授業に慣れるまで、間接指導時の学習補助を民生委員さんをお願いしている。また、国語は担任と特別支援学級担任で学年を分けた授業を一部行っている。

(四) 高学年の学びを保障する取組

深い学びや説明する力をつけるために、理科と社会、算数を学年ごとに指導するために時間割調整した他の職員を配置した。

(五) 教育方法係を中心にした取組

担任任せにせず、教育方法係を中心に共通実践事項を確認して、学力向上対策に取り組ませている。

(六) タブレットの活用

ICT機器活用力を高めるために、教室に一人一台のタブレットを準備し、学習のまとめなどで日常的に活用している。

四 おわりに

小規模校であるが、職員間で課題を共通理解する場、担当による案の作成、企画委員などによる検討を大事にしている。今後も課題を共通理解し、組織を生かして学校経営に取り組んでいきたい。



やれることから考えてみる

鹿屋高 橋 口 浩二郎

一 はじめに

鹿屋高校在任四年目を迎えた。奇しくも着任一年目の八月号に、今回と同じ「わが校の学校経営」について原稿を書かせていただいたことが思い出された。読み返してみても、本校の歴史や校訓・教育方針、それから特色ある行事等については、伝統がしっかり受け継がれていることを再認識するとともに、伝統校の不易の部分が、生徒たちの成長に大きく寄与していることを改めて感じたところである。原稿を懐かしく読み返すところまでは良かったのであるが、原稿を書こうとして、このままでは内容が変わらないことに気づいた次第である。

本校の概要等については、平成二十九年八月号を読んでいただくことにして、今回は最近目に留まった記事を参考に、本校のコロナウイルス感染症への対応を通じて、学校経営について考えてみたい。

二 プロジェクター(PJ)とスクリーン(SC)

「授業で勝負」を合言葉に、アクティブラーニング(AL)を中心に据えて、授業改善に取り組んできた。県の研究指定校として、三年間取り組んできた。この間、職員を県外の

先進校視察に、相当数派遣することができた。彼らが視察から帰ってきて声を揃えて言ったことは、「PJとSCを抱えて授業に行く学校はどこにもありません。何とかありませんか。」であった。それからというもの、限られた予算を出来る範囲でPJの購入に充て、卒業記念品も、テントではなくPJをお願いしてきた。そして、今回の感染症対策で、更に購入できるということ、少なくともPJを抱えて授業に行くことはなくなる予定である。PJについて職員の向きを紹介する。「超単焦点型を黒板の上に設置し、更に可動式だったら言うことはない。」だそうである。

三 目に留まった記事

「いつまで続く『昭和な』授業、コロナ休校で露呈する学校現場の遅れ」という見出しの記事、読んでみると、「文科省のHPには、ICT教育の先進事例だけが並ぶが、公立校の多くはオンライン(OL)授業の環境がなく、ただ休校となっているのが現実だ。」中盤には諸外国に関する記述が続く。「米中伊韓など感染が拡大した各国では、政府が早急に全面的なOL授業に切り替えた。休校が意味するのは登校がなくなるだけで、授業は継

四 出来ることから

続している。日本の多くの公立校とはギャップがある。」そして、後半には「教育用PCの普及率五・六人に一台、教室の無線LAN整備率34%というのが日本の現実(二〇一八年総務省調べ)だ。即座のOL授業実施のハードルは高い。」ずいぶん厳しい言い方であるが、日本の現状を表しているのだろう。

四月末「連休明けからも休校が続くようだと流石にまずい」と思っていたところ、職員から「OL授業を始める準備をやっても良いですか」という声が届いた。その職員は「出来ることから始めていけば、みんなやろうとするときに、問題点を改善できるはず。まずは始めたいのですが……。」ということであった。私自身も「揃ってから始めるということでは、永遠に始まることはない」と思っていたので、「出来る人に声をかけて準備を進めてください。困ったことがあったら相談して」と答えた。案の定、「やれない」と主張する職員からの意見もあったが、一つ一つ問題点を解決し、四月二十四日に全職員でZoom研修会、同二十八日にClass.研修会を経て、五月一日にはZoomで職員朝礼を実施し、五月七&八日には、学年別に生徒を体育館に集合させ、Zoomに入る練習を完了した。これでコロナの第二波がやってきてもOL授業ができる準備は整ったところである。同窓会の協力、先生方の柔軟性、生徒たちの対応力、保護者の理解に感謝するばかりである。「出来ない理由を考える」のではなく、「出来ることをやりながら改善していく」ことも必要な時なのかもしれない。



夢に向かって学習・運動!!

岩北小(隅) 白井和彦

一 はじめに

本校は、全児童十二名の極小規模校である。児童数減少から昨年十月に特認校となり、特認生が一名在籍している。

児童は皆素直で、学年差関係なく仲が良い。「夢に向かって学習・運動!!」を合言葉に岩北ならではの教育活動に取り組んでいる。

二 特色ある取組

(一) 「岩北っ子」伝統の美しいくつつ箱

くつつ箱には、「くつつを整えて、心を整えて、中に入りましょう」という言葉が掲示してある。毎年、下学年が上学年を見習つてくつつ箱やトイレのスリッパをきちんと揃える姿勢が自然と習慣化し、「岩北っ子」の良さ伝統として受け継がれている。

(二) 一人一人の学力向上

ア 言語活動の充実

毎週金曜日の朝の活動(二十五分間)は、新聞記事を読んだ感想を全児童で発表・交流し合う時間である。

具体的には、月々木曜の帰りの会後の十分間を活用し、南日本新聞(オセモコ欄)の気になる記事を読んだ感想をまとめ推敲したり、発表練習したりする。一

一人の発表の良さ等を全児童・職員で伝え合い、少しずつではあるが書く力の向上等につながりつつある。

あわせて、児童の感想や短作文は、計画的に南日本新聞「ひろば欄」に投稿し、児童の書く意欲等につながるようにしている。

イ 各種検定への取組

昨年度から、全児童で漢字検定と算数検定に取り組んでいる。一人一人にとって合格が自信となり、学習に意欲的に取り組む子どもが増えてきたことが大きい。

(三) 児童主体の体力づくり

始業前の朝の体力づくりには、毎朝全児童が主体的に参加している。運動会での演舞に向けた一輪車練習やラダートレニングなど、上学年が下学年を補助しながら一生懸命取り組んでいる。また、計画的に「チャレンジかごしま」に挑戦し、一人一人が目標をもって楽しく運動に取り組んでいる。

あわせて、運動の機会を増やすために、児童会の発案で、昼休みは基本的に校庭や

体育館で全児童一緒に遊ぶようにしている。できるだけ職員も入り、ルールを工夫したボールゲーム等を皆で楽しむ雰囲気が出てきている。

(四) 地域の良さを生かした教育活動

ア 年間を通した米づくり体験
校区関係者と保護者の協力のもと、学習田を活用した米づくり体験に総合で取り組んでいる。

収穫した米を用いたおにぎりを校区の方々と一緒に作り食べながら交流したり、十一月の校区敬老会では、収穫した米に児童がメッセージを添えて高齢者の方々一人一人にプレゼントし喜ばれたりしている。また、一年間の米作り体験で学んだことを、十一月の学習発表会で児童が工夫しながら校区や保護者の方々の前で発表し、参加者の好評を得ている。

イ 地域人材活用による絵手紙教室

九月と十二月の年二回、地域の専門家を講師に招いた絵手紙教室を実施している。年々児童の作品を仕上げる技術が向上し、一人一人の個性豊かな作品に自然と癒される。完成した作品は、「かごしま絵手紙コンクール」に出品し、毎年数名の児童が入賞している。

三

おわりに

児童一人一人の将来の夢や目標の実現に向け「今、できることは何か」更に考える必要がある。極小規模校のメリットを生かした教育活動を今後全職員で更に工夫していきたい。



伊崎田の地域とともに歩む教育活動

伊崎田中(隅) 七 村 穂

一 はじめに

本校区は、志布志市有明町の東部に位置し、肥沃な土地を利用しての茶・果樹園芸・畜産が盛んである。高齢化が進み、生徒数は減少傾向にあり、生徒数三十三人の小規模校である。特色ある学校づくりを目指し、伊崎田のよさを教育に生かすために、平成三十年年度から隣接する伊崎田小学校と小中一貫型教育校「伊崎田学園」として開校した。

学校教育目標を小・中とも同じにし、伊崎田学園のスローガンを「校区教育力日本一」と掲げ、校区全体で伊崎田の子どもを育成していくことを目指している。

二 取組の実際

(一) 行事を通して、伝統の心を育てていく取組
ア 小・中・校区公民館合同の伊崎田大運動会を実施している。小学生と中学生と地域の方が一体となり、互いに応援すること、大運動会を作り上げている。応援団や係活動を通して、中学生が小学生を、小学校高学年の児童が低学年の児童を指導・援助することで、自分より年下を気遣う優しい心の育成が行われている。

イ

地域に伝わる伝統(伊崎田相撲、元旦祭、伊崎田和紙づくり)の継承をしている。伊崎田相撲は百年以上の歴史があり、青少年の健全育成を図ることを目的の一つとしている。女子生徒が協力して制作した化粧まわしを男子が披露し、有志の方から指導を受けて、本番に臨んでいる。

地域を挙げて子どもたちの健やかな成長を願う元旦祭では、女子が地元の白鳥神社で神舞である浦安の舞を披露し、長く続く伝統を受け継いでいる。伊崎田和紙で作られた卒業証書は、校内にある郷土館において、伊崎田和紙保存会の方々の指導のもと、梶の木採取から始まり皮むきなどを行い、最後に自分たちの手で和紙を漉き、完成させたもので、一生の宝として生徒の心に残る物となっている。
ウ 伊崎田サタデー広場での企画・運営を実施している。公民館主催で毎月第3土曜日に行われ、保育園・小学校・公民館・長寿会が連携して運営を行っており、中学校が担当する場合は、生徒会が中心になり活動を行っている。

(二) 地域や家庭と連携した取組

ア 児童・生徒の感謝の気持ちの高揚のために「地域とともに歩む教育活動」を根本に、朝の交通指導は、保護者や地域の方が積極的に取り組んでいる。「地域全体で伊崎田の子どもを守る」という気持ち強い。児童・生徒は、立ち止まって気持ちの良いあいさつを行うことを心がけている。

三 おわりに

新型コロナウイルスの影響で地域とともに歩む教育活動が制限されることもあるが、工夫しながら、「校区教育力日本一」を目指し、学校・家庭・校区が一体となり伊崎田学園の教育目標の実現のために、伊崎田らしい九年を見据えた特色のある学校づくりを展開していきたい。



「自我作古」

石谷小(市) 小 正 公 二

私が小学校教頭職をしていた時である。

校長から一枚の紙切れをいただいた。「自我作古」と書いてあった。そして、校長は続けて、「我より古を作す」と読むことを説明してくれた。その時は、仕事に追われていたため、「ありがとうございます。」とお礼を言って、そのまま手帳に貼り付けた。

数日後、ふと手帳をめくると校長からいただいた文字に目が止まった。校長は、私に何を期待しているのかと考えながら、言葉の意味を調べてみた。福沢諭吉の言葉らしい。意味は、「前例にとらわれず、常識、手本になることを自分で作り出すこと」「過去に成功事例がなければ、過去にやった人がいなければ、自分が歴史を作

ればいいじゃないか」という意味であった。

この言葉の意味を知った時、校長の学校経営への思いと二人で創意工夫して新しいものを作っていくという気持ちを感じ取った。「これまでよりも、これから」という思いであった。

年月は流れ、私も学校の責任者として仕事をするようになった。最初は無我夢中であった。赴任した頃は、前の校長の経営をよく教頭に尋ねていた。これまでのことを維持することが一杯、仕事に追われる日々が続いた。そんな時である。教頭時代にいただいた言葉が頭に浮かんだ。「自我作古」である。「維持では前進がない。前進するためには自分で新しい歴史を築かねば」という気持ちを奮い立たせてくれた。

最近、コロナウイルス感染症への対応や予測不能な時代を生きる子供の育成など大きな課題を抱えている。今だからこそ「自我作古」である。これまでの常識にとらわれることなく、新しいこれからの考え、実践しなければならぬ。

「自我作古」の精神は、どんなに厳しい状況でも、まず自分から取り組み、いかなる困難をも、自分が変えていこうと考え、前へ前へと進んでいく姿勢こそ大切だと教えている。こんな時代だからこそ、新しい歴史を作るために、苦闘を乗り越え、学校の歴史を綴るために頑張りたい。

グラスファイバーのように

亀山小(北) 中 村 義 浩

再配で赴任した旧末吉町の学校では、山坂達者の最後の研究公開が待っていました。体育の研究はやり尽くした感のある中で、町が導入していたカヌーを使った活動を公開授業することになりました。カヌー初体験の私でしたが、様々な方々のご指導をいただきながら、なんとか研究公開は終えることができました。その後、自然の中、体一つで艇を操るカヌーの魅力にはまり、川でのスラローム競技をメインとするカヌー少年団まで作ってしまいました。カヌー艇は、グラスファイバーという布状のガラス繊維に特殊な液体を付けて型取って作ります。川で練習しますから、艇の前後や下を擦って破損することは度々です。そのため、月に一度は、グラスファイバーを使って、補修作業を行わねばなりません。グラスファイバーは、重なる厚さと塗る液体の量によって強度と形を変える実に不思議な素材でした。一方当時の私は、川でも大声で子どもに指示したり、教師主導の授業を押しつけたりするなど、「情熱的」とは少し違つ、力任せの未熟な教員だったと思います。

ある年、当時の校長先生からいただいた年賀

状に、次のような添え書きがありました。「鋼鉄の強さより、グラスファイバーのしなやかな強さを」校長先生が私に伝えたかったことは十分に分かりました。「若くて元氣盛りとは言え、もう少し穏やかに、柔らかく指導できないものか。」そんな思いが文面から伝わり、自覚していた私の心に強く響きました。

年を重ね、責任ある立場になることに、悩みや心配ごとも大きくなったような気がしています。その時々で、ぶれない信念の強さは持ちつつも、事案や相手に応じて柔軟に対応することの大切さを感じています。強く跳ね返して軋轢を生んだり、逆に心がぼつきり折れたりしないために、風に向かって立ちつつも、形や強度を自在に変えるグラスファイバーのように、これからも「しなやかに強く」生きていけたらと思っています。

「五分あれば何かができます」

吉野東中(市) 吉 永 敬一郎

校長会の冊子への原稿としてはたいへん申し

訳ないが、この言葉は、高校三年生の時の学級担任が口癖のようにおっしゃっていた言葉である。もう四十年以上も前のことであるが、今でも覚えている。

当時は、大学入試に向けてクラス全員で精一杯努力していた。そこにこの言葉。「これだけがんばっているのに、まだやれと言うのか!」と腹立たしく思った。ちよつとした隙間時間で無駄にせず、まだまだ努力を詰め込めと云うことか。まるで乾いたぞうきんからさらに水を絞り取るようなきつさを感じた。陰でぶつぶつ言いながらも、今はそれだけやらなければいけない時期なんだ、と自分に言い聞かせながら過ごした。

今になってみると、五分に何か詰め込まなくても、時間を意識して過ごせという意味だったと振り返ることができる。五分あれば思索にふけることもできるし頭を冷やすこともできる。ぼーつとして気持ちのリフレッシュすることに時間を当ててもいいだろう。もちろん英単語を憶えたり、問題を一問解く時間に充てることも。とにかく、みんなに平等に与えられたこの時間を大切にしないさいという教えであった。あまり、有効活用を追求しすぎると、息が詰まる。時間を意識しながらも、心に余裕を持ちながら、一つ一つのことに丁寧にあたっていくきたい。

確かに、五分あれば、何かができる。「あり

がとう、先生!」並みの気づきで申し訳ないが、教職生活に残された時間が少なくなってきた今、はっと気づかされ、しみじみと考えさせられる言葉となっている。

前例踏襲は劣化する 課題を速やかに把握せよ

徳之島高 立 石 賢 二

「心に残るひとこと」というテーマだが、ふたことになってしまった。だが、いずれもかつて仕えたある上司から指導を受けた際に、同じタイミングで頂いた言葉だ。今となっては完全に自分の腑に落ち、後進へのアドバイスの際にも用いている言葉だが、当時は目からうろこが落ちる思いがした。私自身も誠実に前例踏襲をすることを良しとする、凡庸な教員だった。

一般的な教員が通常、年度初めに文書ファイルと共に仕事を引き継いだ際にまず意識することは、前年度の状況を十分に把握し、なるべく「穴」を開けないようにしよう、という点だろう。良心的で誠実な方が多い教員の世界では、前例踏襲が十分に出来ない残念な例は皆無では無い

ある日の校長講話



働くことと喜んでもらうこと

犬迫小(市) 花山潤治

が少ないと思う。しかし、前例踏襲だけでは環境変化への対応が不十分となり、組織の対応力は確実に低下する。そのような例は枚挙にいとまが無い。その結果について、「我々は頑張ったが環境が変化したから…」と責任転嫁する例も様々な場面で見受けられる(そして我々は「人事異動」により定期的にそれぞれの現場を離れるので、劣化の責任を直接負うことが無い)。つまり、前例踏襲の確実な履行のみを意識し、「大過なく」任期を全うする事のみに意識が向くと、組織の対応力は確実に劣化する。組織をそのような状況に至らしめたリーダーは、「組織を劣化させたリーダー」の誹りを免れないのではないだろうか。

前例踏襲主義に陥らないためには、課題に早く気がつく事がまず必要だ。校長に与えられた時間は限られているので、素早く課題を把握し迅速に改善に着手する必要がある。課題を早く、かつ背景に至るまで分析的に、かつ正確に捉えることが出来て初めて、その課題に対する改善改革案を企画し、実行に移し、PDCAに乗せていくことが出来る。

「前例踏襲は劣化する」なぜあのタイミングで上司が私にこの言葉をかけてくれたのか。感謝と共に振り返る今、気がつく校長としての日々も残り少なくなっている。

学校には皆さんの夢が掲示してあります。みんなの夢がかなうと人が喜んでくれるね。皆さんに尋ねます。「人に喜んでもらうこと」が気持ちいいと思う人、手をあげてください。

「ドラえもん」を観たことがある人、手をあげてください。歌を聴いたことがある人、歌える人、今日は歌わせません。楽しいからみんなが観るね。それに関わって働いている人がいるね。絵を描く人、アニメーションにする人、音楽をつくる人、声優さん、グッズをつくる人、売る人、映画の宣伝をする人、映画館の人…たくさんの方が夢を叶えながらこの映画に関わっているけれど、その大本は「人に喜んでも

らいたい」という、働いている人の気持ちなんです。

皆さんが使っている筆箱も靴も消しゴムも、つくった人が、人に喜んでもらえるように考えて、一生懸命つくり出されました。時計も、道路も、働いている人しかつくっていません。

そうなんです。働いている人がいなかったら私たちは生活できないんです。世界は働いている人のおかげで動いているんです。野球のイチローも、サッカーの大迫も、みんなの好きな歌手もそうです。夢を叶えるために一生懸命に練習して人に喜んでもらっています。

夢の大きさは大きくても小さくてもいいんです。夢が変わってもいいんです。だって、新しい仕事がどんどん生まれてくるから。だって皆さんはこれから新しい仕事を知っていくから。

いまずぐ働くことはできないね。でも今できることがあります。お家の人や先生、友達に喜んでもらうことや夢を自分の中につくることです。ただ一つだけ気をつけたいことは、夢は言っているだけでは叶わないということ、一生懸命に頑張っていると叶います。夢がどんなに変わっても、なりたい仕事がどんなに変わっても絶対役に立つ生き方、それは「一生懸命になれる」ことです。鉄棒が好きな人は鉄棒を、サッカー、野球、作文、絵、なわとび、算数…何でもいいんです。何かに一生懸命になること

はどんな仕事についても人に喜ばれる人になるんです。嘘じゃないです。「一生懸命」は、大人になったときに必ずみんなを助けてくれます。どんなに大変なこと、どんなに悲しいことが起きても一生懸命に取り組み自分がいれば乗り越えられるようになるんです。

皆さんが夢を叶えられる、人を喜ばせる人になることを祈っています。

校長先生のお話をいつも一生懸命に聴いてくれてありがとうございます。感謝しています。

「かけがえのない命」

大隅南小(隅) 大山 浩 治

今日は、「かけがえのない命」についてお話しします。

この前にかぶせてあるかこの中にはある生き物が入っています。

うさぎです。

このうさぎは、ある学校で飼っていたうさぎですが、十か月前に産まれたばかりの頃は、子うさぎが何羽もいる中で、いつも端っこの方に

追いやられて、えさを十分に食べることができませんでした。それが何日も続くと、他の子うさぎと比べて、明らかに小さいのがよく分かるようになりました。そして、だんだんと弱ってきたのです。このままでは、おそらく栄養失調で死んでしまうのではないかと思い、校長先生の家で飼うことにしました。

最初家に来たときには、周りを警戒してなかなか懐こうとしません。えさをやってもたくさんを食ふことができません。なので、病院に連れて行きました。栄養がたりていないということ、急遽点滴を打つことになりました。薬ももらいました。

毎日、薬を飲ませることで、だんだんと元気を取り戻していきました。今では、人にも慣れて、ふさふさの毛になり、さわるととても気持ちいいです。

「ミンクの毛皮みたい。」と校長先生が言うと、家族のみんなは、「毛皮なんかにしないでよ。」と怒られる始末です。

病院の先生からは、「もう大丈夫でしょう。」と言われました。家に連れてきて、ちょうど二か月でした。それまでに子うさぎは、命がけで一生懸命に生きようとしたのです。

皆さん、みんな一人ひとりであって、世界でたった一つしかないものは、何でしょう。それは、「命」です。みんな一人ひとりの命はかけ

がえのないものなのです。そのかけがえのない自分の命や周りの命を大切にしていてほしいです。

最後に、このうさぎの名前は、「うーちゃん」です。今では、家中を飛び跳ねて、元気いっぱいに過ごしています。今日は、ふさふさのうーちゃんうさぎをさわってみてくださいね。かわいいですよ。

現場実習に向けて

鹿児島高等特別支援学校 小山 昭 洋

みなさん、おはようございます。

先月の全校集会では、昔々の日本で、疫病対策に、全国の神社に「手水舎」という手洗い場を作り、一度は減ってしまった人口が逆に増えたという話をしました。この手水舎の役割を皆さんに聞いたとき、一年生の中から「お清めをするところですか。」という答えが返ってきたのには私は驚き、また大変嬉しく思いました。

緊急事態宣言は解除されましたが、しばらくは衛生管理に気を付けて過ごしましょう。

さて、まもなく現場実習が始まりますので、少し日本の自慢話をします。日本には、それぞれの業種において、世界トップのシェアを誇る会社、いわゆる「小さな世界一企業」が一千社もあるそうです。匠の技が細部まで生かされ、簡単には真似のできない、とても高度な技術で作られている工業製品などが世界中から重宝がられています。その信頼度の高さ故に世界のトップシェアを占めている会社が多いのです。

これらの優秀な会社に共通していることを三つ紹介します。

一つ目は「一つのこと」に一途に徹していることです。二つ目は「お客様の要求に応えようと必死に挑戦する」ことです。三つ目は「時間をかけてとことん技術を開発し、技能を深めている」ことです。これらのことを紹介する伊勢さんは、さらに、会社を支える社員の素晴らしさを強調しています。それは、日本人が「礼儀正しく」、「笑顔」で、「上機嫌で接してくる」ことだそうです。これが、日本に、小さな世界一企業が一千社もある理由だと説いています。

いよいよ、今年度初めての実習です。三年生諸君、就職を勝ち取りましょう。二年生は、自分の適正を確かなものにしきましょう。一年生は、学校を会社に見立てた初めての实習です。個人目標を達成できるように頑張ってください。

話のひろば



バージョンアップ

佐志小(北)

狩集雅人

新学習指導要領完全実施の年を迎えた。

外国語をはじめ、新しい学習内容が盛り込まれた。本校においても、研究テーマをプログラミング教育を含んだICT活用を設定し、現状においてできることから取り組んでいるところである。

ある日の研修で、近頃よく耳にするようになった「Zoom」を扱った。アプリケーションをインストールしたまではよかったが、何と校長用のパソコンにはカメラがついていなかった。職員が操作しながら盛り上がりつつある中を画面のぞき込む程度しか参加できず、寂しさを感じた。別の日に今度はプログラミング教育用のソフトウェア「Scratch」の研修を行った。今度は大丈夫とソフトウェアをダウンロードしてインストールしようとしたところ、「本ソフトウェアは64ビットOSが必要です。」の表示が

出て終了してしまつた。慌ててOSのバージョンを確認すると「32ビット」であった。他の職員の公務用パソコンのOSのバージョンを確認すると、そこには「64ビット」の文字が……。結局今回も操作はできず、周囲から聞こえてくる「ニヤァ」という独特の起動音をうらやましく聞くだけであつた。

そのようなことを経験してふと思つたのは、パソコンであればOSやハードウェアを更新すれば、すぐに新しいものにも対応できるが、人間はそうはいかないということだ。特にこれまでの経験があまり生かせない分野については、対応策を考えてはみるものの先送りしたり、人任せにしたりしてなかなか一歩を踏み出せないことが多いように感じる。逆に、自分の経験に固執して柔軟な対応ができないこともある。

そう考えると、少し時間はかかるが、新しいものごとに対応するためには、まず情報を収集し自分の中に受け入れるための素地をつくっておくこと、そして実際に見たり体験したりすることで修正や情報の追加を行い、よりよい対応を構築していくしかないのではないだろうか。

身体のバージョンアップは年齢的にも難しいものがあるが、中身のバージョンアップはまだまだ可能であることを信じて、日々研鑽に努めたい。

しわの付いた

一枚の紙

別府中(南)

竹下

誠

ずいぶん昔の話である。離島の小さな学校で初任者としての勤務を終え、再配として赴任した学校は、大規模校で生徒指導面でも多くの課題を抱えていた。ありとあらゆる問題行動が毎日のように起こり、その対応に多くの時間を費やす日々で、環境の変化に戸惑っていたことを覚えている。

当時、担任した生徒の中で、卒業後に劇的な変化を見せてくれた生徒がいた。とにかく問題行動の多い生徒で、母親も子育てに大変苦労していた。ほとんど授業も受けていなかったのが高校にも進学せず就職したが、卒業後の彼の様子については、ほとんど情報が入ってこなかった。

約十年後、既に別の学校に転動していた私のところにその生徒がやってきた。話を聞くと今は建設業の仕事をしつかりと頑張っているそうで、昔と違って穏やかな明るい表情が印象的な好青年に成長していた。その教え子が帰り際に、「先生、これ。」と恥ずかしそうに、しわの付いた一枚の紙を差し出した。なんと、大学入学資格検定の合格通知書だった。彼は仕事上で必要となる資格を取るために、どうしても高校卒業程度の認定が必要で、働きながら必死に勉強し

て取得したと話してくれた。驚いた。中学校の頃を考えると想像もできなかった。中学校の頃に心配をかけた担任に、自分の成長を見せたかったのだろう。そして、自分の頑張りを褒めて欲しかったのだろう。そのことが本心に嬉しく、とても感動したことを覚えている。

彼には、簡単には取得できない資格を取れるだけの力があつたのだ。しかし、中学生の彼はそれに気づいていなかった。私も気づいていなかったし、発揮させることができなかった。おそらく、彼を理解しようとする努力が不足していたのであろう。よく「若者には無限の可能性がある。」と言われるが、本当にそうだと思います。反省もした。そして、このできごとは、教育に対する自分の姿勢を問い直すきっかけを与えてくれた。今でも彼に感謝している。



伝えたい

郷土の「誇らしさ」

芦花部小中(大)

今村敏照

初めて奄美大島の小中学校に赴任し、二年目の夏を迎えた。

本校の児童生徒は、

校庭のアカギの太木でキノボリトカゲと遊ぶ。近くの川ではタナガ(テナガエビ)が捕れ、裏山からはアカゲラが木を叩く音やアカシヨウビンのさえずりが聞こえる。奄美の風土そのものに包まれ、子どもたちはのびのびと学んでいる。

奄美大島は魅力溢れる島だ。色鮮やかな植物に彩られた海岸道をドライブすれば、島は地域ごとに様々な貌をみせる。ハブに護られた深く険しい中南部の亜熱帯森。北部の低丘陵地のサトウキビ畑。南東部の湿原に広がるマングローブ。複雑なリアス式の海岸線を走れば、尾根の狭間に抱かれた集落(シマ)をいくつも過ぎる。かつて各シマ間の移動は舟が主体で、隣同士でも風習や踊り・唄・方言などが少しづつ違う。

どのシマにも古に神が降り立ったオガミ山がある。中央広場(ミヤ)から海に向かって神道が伸び、海岸近くの砂丘地(カネク)では海の彼方「ネリヤカナヤ」から稲魂を招き寄せる行事などが行われ、豊作を祝う八月踊りが夜通し続く。これらは現在も多くのシマで受け継がれ、生活に寄り添うように息づいている。

赴任後半年程たった頃、ある中二の女生徒の

作文が目止まった。彼女は、本土から来た観光客に「あなたシマの子でしょ？」と島内の見所について聞かれて思うように答えられず、「私はシマの子」と自信をもって言えるのかと悩む。近い将来、奄美が世界自然遺産に登録されて観光客が増え、再び問われたときに胸を張って島の魅力を伝えられるよう、もつと自分の郷土に誇りと興味をもちたい。彼女はそう締めくくった。本校を含め大島地区のどの学校でも「多様で特色ある郷土教育」に取り組んでいる。にもかかわらず、子どもたちに自分たちの郷土について、充分には理解させられていない現状がある。

奄美は魅力に溢れている。自然も文化も人も。生活を重ねるごとに実感できる。あまりに身近すぎて、当たり前すぎて、そのことに気付けないシマの子たちに、自分が生まれ育った郷土の「誇らしさ」を全力で伝えていきたい。



読書案内



■大谷 光淳 著

ありのままに、ひたむきに

生福小(市) 菊 谷 俊 一

年令を重ねてくると必然的に僧侶様の話を拝聴する機会が増えてきているように感じる。「なるほど」と心を打たれることも少なくない。そんな折りに、紹介された一冊であり、著者は、浄土真宗本願寺派第二十五代門主本願寺住職である。

現代社会には、様々な問題が山積しており、先行きが不透明な時代と言われることも多い。しかしながら、「先行きが見えている時代」も果たしてあっただろうか。次々と訪れる変化の波に耐え、課題解決策を見出しながら、これからの時代を生き抜いていくためにはどうした

らいいのだろうか。そのような思いに対して本書では、「日々の一瞬一瞬を、まずはありのままに受け止め、そしてひたむきにきらめずに精一杯生きていくこと」が大事であることや「支え合うことの大切さ」を、さらには、悩みや苦しみの原因が「自分の考え方に対するとらわれ」「自己中心的な考え方にある」ことなどを仏教の教えをもとに説いている。

なお、途中からは、Jリーガーの遠藤保仁氏との対談も紹介されている。対談の中で遠藤氏は「サッカーで言うと、実際にプレーする人同士が自分たちで考えて動くチームや組織がやはり強い。」とリーダー論についても語っている。学校に置きかえてみても同じことがいえるのではないだろうか。

さて、本校の職員の間には、「共感・共汗」という言葉がある。「共感」には、一人一人の違いをありのままに受け止め、認め合っていること。「共汗」には、何事も前向きに考え、共に素敵な汗を流しながら、子どもたちと一緒に成長していこうという本校職員の姿を表しており、著者や遠藤氏の思いと通ずるものがあると感じている。

本書は、様々な課題と日々奮闘している私たちに、心の安らぎや生きるよりどころとなるきっかけを与えてくれる、そんな一冊である。

PHP研究所 六〇〇円

■木村泰子・高山恵子 著

「みんなの学校」から社会を変える 障害がある子を排除しない教育への道

川原小(始) 栗野彰彦

「大空は自分の学校です。」これは、この本の著者である大阪市立大空小学校の元校長木村泰子先生が、「大空はひと言で言えばどんな学校ですか。」と司会者に尋ねられ、会場に来ていた卒業生が代わりに答えた言葉である。また、大空小と言えば、「ご存知の方もいるかと思うが、ドキュメント映画『みんなの学校』で舞台となった学校である。この映画を観て、教室を歩き回る子どもや喧嘩の際に手が出てしまう子ども等、課題を抱えている子どもたちが、周りの友だちや先生、地域の方と繋がりを成長していく姿に、大空小のような学校づくりをしたいと思っただ方も多数いるかと思う。

この本は、木村先生の大空小での体験をNPO法人えじそんくらぶの代表で臨床心理士である高山恵子先生との対談形式で、木村先生は学校教育の現場から、高山先生は、多くの発達障害の子どもたちと関わってきた立場から学校づくりについて書かれている。

書かれている内容の一部を紹介すると、創設時から子どもの居場所づくりを一緒に考えてき

た教職員や子どもと大喧嘩をする地域の方、「障害」がある子どもたちとその子を取り巻く子どもたちとのエピソードの中から、地域のひととの関わり方、子どもたちとの関わり方、公立の学校としての在り方等多くのヒントが語られている。さらに、このサブタイトルにもあるとおり、障害がある子がみんなと学ぶためには「障害がある」「障害がない」という「くくり」で考えるのではなく、「その子にとつて、必要なことは何か。」を起点に考えていくことの大切さを伝えている。そして、子ども同士の関係性を繋いでいくインクルーシブ教育と大人の役割についても説明している。

この本を読めば、どのようにして冒頭の卒業生のように自分の学校に誇りや自信をもたせることができるのか、その答えを知ることができる。是非、読まれてみて、他の方にもお勧めの本として紹介していただければと思う。

小学館新書 八〇〇円



■西郷隆盛公奉賛会 著

西郷どんの教え

古田小(熊) 豊永守

鹿児島島の偉人と言え、明治維新の立役者である西郷さんの名前を挙げる人は少なくないのではなからうか。わたしも小学生の頃にたくさん偉人の伝記を読む中で知った人物である。紹介する本書は明日を担う子どもたちへ『西郷南洲翁遺訓』を伝えたいという思いで作られた本である。本書との出会いは、沖永良部島の和泊町に勤務していた時である。和泊は西郷さんが島津久光公の怒りにふれ、重罪人として流刑となった地である。一年六か月あまりを過ごしたこの地での過酷な牢生活を経て、「敬天愛人」の思想を悟ったと言われている。町内の全小学校は、礼儀正しく自立心に富む子どもの育成を目標に「郷土で育てる肝心^{ちひぐるま}」の教育として「お茶」と「郷土の教え」の二つの活動を行っていた。その一つ「郷土の教え」の時間は、「西郷南洲翁や郷土の先人の生き方、郷土の教えを体験的に学び、基本的な生活習慣や社会規範を身に付けさせるとともに、郷土のよさに気付き、祖先を敬い、周りの人々を大切にしようとする子どもを育てる」ことをねらいとしていた。その当時、西郷さんの教えを学校生活を含めた日常生活

活に置き換えてある本書の内容を取りあげて子どもたちに話をしてきた。それ以来、指南書として読み返している。西郷さんは書物は書き残していないが、和歌や漢詩を残している。その中でわたしが好きな和歌が次の二首である。

◎上衣は さもあらばあれ 敷島の 大和錦を心にぞ着る (訳) 着ているものは見すばらしくてもいい。日本人が昔からもつ清らかな心をもちなさい。

◎憂きことの 稀にしあれば くるしきを 常と思へば 樂しかりけり (訳) つらく悲しいこともそれが当たり前と思えば楽になる。

国難である新型コロナウィルスの脅威の中、我々が今前向きに協力して進めるべき事のヒントを示す本書は、青少年向けではあるが『西郷南洲翁遺訓』と共に読み返したい一冊である。

※肝心(ちむぐる)〜思いやり、優しさ、人を気づかう心という意味

西郷隆盛公奉賛会 五五〇円



■磯田道史 著

日本史の内幕

田檢小(天) 前 田 和 洋

小学校の頃から歴史上の人物の伝記を読むのが好きであった。それにより、大河ドラマや時代劇は欠かさず視聴し、源義経や織田信長の英雄としての姿や農民から天下人になった豊臣秀吉の立身出世への憧れ、裏切り者としての明智光秀への嫌悪など、伝記の表現のままに信じて疑わない少年時代がある。しかし、いつ頃からだろうか。今まで当たり前としていた歴史上の英雄や偉人の姿は、本当に尊敬に値する姿だったのだろうかという疑問を抱くようになってきた。そこから、歴史上の裏話に興味をもち、その人物の教科書や伝記に現れてこない部分に歴史の面白さを感じるようになった。また、名もない一般庶民の暮らしから見える往時の歴史にも興味をもてるようになった。私が主に愛読しているのが、歴史学者の磯田道史氏の著書である。磯田氏の作品には、映画化もされた「武士の家計簿」(新潮新書)や「穀田屋十三郎」(中根東里)「大田垣蓮月」の三話からなる「無私の日本人」(文春文庫)などがあり、テレビの歴史解説でも、常に新しい視点で歴史に切り込んでいる。本書もまえがきに、「この本は、古

文書という入口から、公式の日本史の楽屋に入り、その内幕を見ることで、真の歴史像に迫ろうとする本である。だから、教科書的な、表向きの歴史理解にとどまらず、歴史常識を維持したい方は、読まれないほうがよい本かもしれない。」と記述されている。実際に日本各地で新たに発見された古文書を読み解いた内容を五・六ページにまとめた短編が七章に項目ごとにとめられ、読みやすく、一気に読破することができた。各章も「古文書発掘、遺跡も発掘」、「災害から立ち上がる日本人」のように、庶民の暮らしから、「家康の出世街道」、「幕末維新の裏側」のように、教科書でも馴染みの歴史の内幕を現した内容と多岐にわたっている。子どもにも歴史の話として伝えられる楽しい内容なので、是非御一読いただきたい。

中公新書 八四〇円



「九十二歳です。百歳まで歌い続けます。」

私は前職が鹿児島市にある地域公民館で、生涯学習の拠点として市民の方々に学びを提供する業務を行っていた。冒頭の言葉は、公民館で活動している民謡グループの方のものである。この方は、子育ても終わり何か趣味でもと一念発起、公民館で学びを始め、四十年近く歌い続けていた。実は踊る民謡と勘違いして入会したが、その奥深さに魅了されたとのこと。

さて、今回執筆を依頼され、無趣味の私には荷が重く感じられたが、前述の方のように自ら進んで始めたのではなかったが、結果としてのめり込んだことを紹介したい。

まずは大学時代から。入学と同時にマンドリンという楽器の同好会に入った。元々音楽に興味を持っていたわけでもなく、数ある新入生勧誘のどさくさの中で気がついたら入部していた程度のものであった。おそらく長続きはしないだろうと思っていたが、月日が経つにつれてのめり込んでいく私があった。マンドリンと言っても個人で演奏するのではなく、マンドリンの他に、中音・低音を担当する楽器（オーケストラのヴィオラやチェロにあたる）、ギターそしてコントラバスの弦楽六部編成で演奏する。昨年、創部五十周年の記念演奏会並びに懇親会があり、現役生から還暦を超えたOBが集まり、世代を超えて半世紀の歴史について語り合った。一つの楽器を通して、多くの仲間を得ることができたように感じている。

教員になり最初の赴任地でソフトテニスと出会った。この学校には県内でも珍しいソフトテ

趣味・文芸

『偶然からの出会い』

ニスのスポーツ少年団があり、指導はその学校の職員が行っていた。前任者の異動に伴い後継者を探している中で赴任であった。折しも、初任者研修が始まった年で、教員としての資質向上を第一にと思っていた矢先、指導をしてもらえないかという依頼を受けた。正直、経験もなく、初任研でそれどころではないと思っていたが、当時の学校長に相談したところ、「先生、やらんといかんかもな。保護者も期待してるいるよ。」の一言で引き受けることとなった。慌てたのはそこからで、専門書を購入したり、保護者の紹介でソフトテニスのクラブに入会したり、教材研究より力を入れた時もあった。する

池田小(南) 山本省 吾

と、これがなんと面白いことか。サブ一つにしてもいろいろな打ち方があり、前衛・後衛の戦術も知れば知るほど面白い。子どもたちへの指導もだが、自らがソフトテニスの魅力にはまっていたのを記憶している。私自身は大会に出るとかが目標ではなく、あくまでも趣味・体力作りの一環であった。ちなみに、当時の教え子のうち三人が高校の時インターハイに出場した。教え子曰く、「先生から技術を教わった記憶はあまりなかったけど、先生が一番楽しそうにソフトテニスをしてたよ。」とのこと。微妙な言葉の言い回しに苦笑いするしかなかった。

最後にもう一つ。教頭として赴任した離島で

のイカ釣りである。時がゆったり流れるのが離島のよさである。そんなとき、地域の釣り名人から、「イカ釣りをせんな。」と声をかけられた。釣りは経験あったので、早速釣具屋さんに行き、竿と疑似餌の購入からはじめた。店主にいろいろ聞き、海の状況に合わせて使い分けるようアドバイスを受け、名人とともに海へ。ちなみに名人の竿はそれほど高価な感じもなく、疑似餌も自らこさえたような出来映えの物であった。開始五分、名人が一杯目を釣り上げ、しばらくすると二杯目がヒット。瞬く間に釣り上げ、その場を後にした。名人曰く、「海の恵みだから食べる分だけで十分。」残念ながらその日は、

私の竿にはイカは寄りつかなかった。以後、在任中幾度となく海へ行き、出勤前の四時起床で、釣りをしてから職場へ向かうこともあった。

このように私の趣味は、決して望んでではじめたわけではない。偶然というかたまたまはじめたことが多い。にもかかわらず、のめり込んだのは人を介したからであると思う。もちろん、一人で没頭する趣味も数多くある。私の場合は、趣味そのものとともに人とつながりがより深みを増したように思う。

人生百年時代が到来している。まだ折り返したばかりで、仕事中心の日々ではある。そんな中、冒頭の公民館利用者のように、偶然からでもよいので何か没頭できるものと出会うことを今後の楽しみにしたい。



「歴史に学ぶ」

「地域に学ぶ」「海に学ぶ」

坊津学園(南) 濱弓場 一 誠

一 日本三津の一つ「坊津」

鹿児島県南さつま市坊津地域は、薩摩半島の西南部、東シナ海に面したリアス式海岸の町である。南北に延びる海岸線には、坊津諸港として知られる、坊浦(坊津)、泊浦、久志浦、秋目浦などの天然の良港が並んでいる。

日本の南玄関口、海上交通の要所に所在している坊津は、かつて博多津(現在の福岡県福岡市)、安濃津(現在の三重県津市)とともに、日本三津(にほんさんしん)の一つに挙げられた歴史的な港として知られている。坊津は、中世後期を中心に、東シナ海を航海する数多くの国内外の船が利用する対外要港、琉球や中国等との貿易の中継地として栄えた。

坊津の船舶が琉球へ渡航することを認可した島津義久の朱印状なども残っており、当時の繁栄を偲ばせている。

二 坊津と唐僧「鑑真」・仏教文化

奈良時代の天平勝宝五年十二月二十日には、唐から南西諸島を経て日本へ帰国した遣唐使船が、唐の高僧「鑑真」を乗せて、薩摩国阿多郡秋妻屋浦(現在の南さつま市坊津町秋目)に寄港した。来日した鑑真は、日本に

おける戒律制度の整備に尽力し、奈良の唐招提寺を創建した。鑑真は、様々な大陸文化を当時の日本に持ち込んだとも言われている。

また、かつての坊津には、薩摩藩内でも有数の真言宗寺院であった一乗院(西海金剛峯如意珠山龍嚴寺一乗院)が所在していた。一乗院は、島津氏の尊崇も厚く、十六世紀には後奈良天皇の勅願所にもなるなど繁栄した。明治時代初期の廃仏毀釈によって廃寺となり、取り壊されたが、現在もその跡地(旧坊泊小学校跡地)には、石造りの仁王像や上人墓(一乗院の僧侶の墓)などが残っている。

三 絶景の地として知られた坊津

坊津は、古くから景色の優れた場所としても知られ、多くの人々の目を楽しませてきた。自然に彩られた雄大なリアス式海岸は、類まれな美しい景観を生み出している。特に坊浦の入口付近、網代浦の海上にそびえる二本の剣の形をした「双剣石」は、坊津のシンボルとして知られており、その周辺は国指定名勝「坊津」として、国の文化財指定を受けている。江戸時代の浮世絵師として著名な歌川広重の「六十余州名所図会」シリーズでは、薩摩国の代表的な名所として「坊ノ浦 雙剣石」が描かれた。この双剣石が所在している網代浦は「坊津八景」の一景である「網代夕照」の舞台ともなっている。

また、坊津と枕崎を結ぶ「耳取峠」も古くから景色の良い場所として知られてきた。耳取峠から東の方角を眺めると、開聞岳(薩摩富士)をはじめとした山々や海岸線、枕崎の立神岩、はるか遠くには大隅半島の佐多岬などまで見渡すことができる。現在の耳取峠の展望所(国道二二六号沿い)には、十九世紀の薩摩の歌人、八田知紀が耳取峠で詠んだ和

四 終わりに

歌の歌碑も建てられている。

坊津学園は、平成二十九年に県内初の義務教育学校の一つとして開校した。南さつま市の南西に位置し、美しい入江を見下ろす高台の新校舎で一、九百三十名の児童生徒が一緒に学んでいる。地域の教育に対する期待度は高く、県内初のコミュニティ・スクールとして、地域と共にある学校づくりに努めている。本校の特色ある教育の目玉である、特別教科「坊津学」では、ここに挙げたふるさと坊津について、九年間で系統的に学習している。「歴史に学ぶ」「地域に学ぶ」「海に学ぶ」の三領域の学習を通して、地域を愛する、誇れる子どもの育成を図っている。

【主要参考文献】

坊津町郷土誌編纂委員会『坊津町郷土誌』上巻、坊津町、一九六九年
坊津町郷土誌編纂委員会『坊津町郷土誌』下巻、坊津町、一九七二年



歌川広重「六十余州名所図会 薩摩 坊ノ浦 雙剣石」
画像：国立国会図書館デジタルコレクションより

*** こころの詩 ***

向日葵（ひまわり）

おてんとさまの車の輪、
黄金きんのきれいな車の輪。

青い空をゆくときは、
黄金きんのひびきをたてました。

白い雲をゆくときに、
見たは小さな黒い星。

天でも地でも誰知らぬ、
黒い星を轆くまくまいと、
急に曲った車の輪。

おてんとさまはほり出され、
真赤ましかになってお腹立ち、
黄金きんのきれいな車の輪、
はるか下界へすてられた、
むかし、むかしにすてられた。
いまも、黄金こがねの車の輪、
お日を慕しのうてまわります。

金子みすゞ

一般財団法人鹿児島県校長会館だより

一般財団法人鹿児島県校長会館としての登記が完了しましたのでご報告いたします。

※ 本年度十二月に予定していた教育講演会は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止となりました。

教育長異動

○再任 令和二年七月一日付
南大隅町 山崎 洋一 氏

季節の言葉 「甘酒」（一夜酒）

あま酒の地獄もらかし箱根山 藍村

冬の季語かと思いきや、夏の季語である。白米を焚いて十分に搗きつぶし米麴とまぜて密封し一晚置か、粥に焚いた白米に米麴を混ぜ密封する。両者とも温度によって発酵の違いがあるが、一夜でできあがることから一夜酒ともいわれ、古くは祭酒に使われた。江戸時代には暑気を散ずるとして夏に好んで飲まれていたが、現在では主に冬に熱したものが飲まれることが多い。

編集

後記



漢字のふりがなを「ルビ」ということがありますが、この名称は宝石の「ルビー」に由来しているそうです。昔の欧米では、活版印刷で使われる活字の大きさを表す一定の単位がなく、活字に通称をつけてその大小を区別していました。通称としては、ダイヤモンド、パール、エメラルドなど宝石の名前や宝石に関する名前が多く使われていました。日本で漢字のふりがなに使用されていた活字の大きさが、欧米で「ルビー」と称されていた活字の大きさに近かったことから、次第に、ふりがな「ルビー」（ルビ）として定着していったのだそうです。活字の大きさの通称として、宝石の名前が多く使われたのは、活字の美しさを宝石の美しさになぞらえてのことだったのでしょうか。確かな理由はわかりませんが、ちょっと素敵だと思っことでした。

ところで、「ルビ」は活版印刷において生まれた呼称なので、手書き文字やワープロ文字につけたふりがなは、厳密には「ルビ」と呼べないのでは？

この度、『鹿児島の教育八月号』を皆様にお届けすることができました。今月号もまた、学校の管理・経営を進めていく上でヒントとなる数多くの情報をいただきました。御多用な中、玉稿をお寄せくださいました皆様に厚く御礼申し上げます。

鹿児島女子高 北 浩憲